

北海道・花と山の旅

——礼文岳、利尻岳、羊蹄山

佐藤 久尚（昭41年卒）

脊柱管狭窄症という難病（症状：数百m歩くと左足が痺れてくる）に取り付かれて、ここ数年ほとんど山らしい山に行っていないが、昨年8月、針葉樹会有志によるニペソツ山行に思い切って参加したところ、11時間超という長丁場にもかかわらず、何とか最後まで歩き通せた。そしてこの山行で少し自信を取り戻すとともに、何よりも北海道の山（というより北海道）に魅せられました。

また北海道の山に行く計画は無いかと密かに思っていたところ、昨年11月、アダージオでの針葉樹会懇親山行の際、蛭川さんが来年、利尻岳に行く計画があるということを知りその場で同行をお願いしました。

蛭川さんの計画は、蛭川さんの8人乗りの車で新潟港経由フェリーで小樽に渡り、稚内までドライブし、再びフェリーで礼文島、利尻島に渡って礼文岳、利尻岳に登り、さらに

その後ニセコまで戻って羊蹄山に登るという計画。私にとっては、山登りだけでなく、フェリーでの船旅あり、北海道の大地でのドライブありで、大変魅力的なものでした。但し、車の定員の関係で参加者数に限りがあるとのことでしたが、幸いにも参加を認めていただき、7月初旬のベストシーズンに北海道の山と花と海の幸を堪能する旅を経験することができました。

今回の参加者は次の7名でしたが、日頃の心掛けの良い人ばかりだったので、北海道滞在中は、最初の半日を除いて雨に降られることも無く比較的好天に恵まれた毎日でした。

（参加者） 佐藤恭、丸山則二、蛭川隆夫、蛭川紀巳子（蛭川夫人）、本間浩、小島和人、佐藤久尚

7月4日 曇り後雨 “いざ出発”

奥様と北海道を旅行した後、礼文島で合流する予定の小島さんを除いた6名が23時50分にJR八王子駅北口前広場に集合し蛭川車で出発、日の出インテアから外環道に乗り鶴ヶ島で関越道に入りひたすら新潟港を目指して進む。途中の赤城パーキングエリアで小休止し運転を蛭川さんと交代したが、真夜中のドライブなので、眠気を抑えるのに苦労した。

なお、今回の計画では、八王子く新潟(307km)、小樽く稚内(380km)、稚内くニセコ(477km)、ニセコく小樽(86km)、新潟く八王子(307km)、総距離1557kmを車で移動することになるため、事前にドライバーとナビゲーターの役割分担と交代の順番を決め、全行程それに従って運転免許所有者5人が交代で運転することにした。

7月5日 雨後曇り “フェリーの旅”

5時少し過ぎに新潟港のフェリー乗り場に着、フェリーの乗船時刻までには3時間以上も時間があつたが、明日の行程を考えると少しでも早くフェリーから降りる必要がある。そのため、早くフェリーに乗れば早く降りられるだろうと思つてフェリー乗り場駐車場の先頭に車を止めて乗船を待つ(後刻判明したのだが、フェリーは先頭に並べば必ずしも一番に乗れて早く降りられるというものではなく、乗船下船の順番はトラックと身体障害者や子供連れの人の車が優先)。

9時30分に乗船、10時30分に出航、フェリーは18300トンでトラック146台、乗用車58台を積める想像していた以上に大きい。中にはレストラン、カフェテリア、ゲーム室、映画館、大きな風呂場まである。ハイシーズンで北海道に行く人が多いせい、ほ

ぼ満車状態であつた。

小樽港までの所要時間は約16時間、フェリーの中ではさぞかし退屈で時間をもてあますのではと思つて、小説を二冊持参したが、6人もいると話題に事欠かず、話と酒に花が咲き、昼食時に昼酒、夕食後も寝酒と飲みながら話しながらしているうちにいつしか時間も過ぎてしまった。

7月6日 小雨後晴れ “礼文岳登頂”

小樽港に4時30分定刻に到着。昨日、乗船時にしつこく係員に頼み込んで、一刻も早く下船できるような位置に駐車させてもらったお陰で、5、6番目にフェリーから降りることができた。今日は稚内発10時50分の礼文行きの船に乗らなければならないため、小樽から稚内までの380kmを遅くとも6時間以内で走り抜ける必要がある。しかしながら蛭川さんが事前に“北の道ナビ”で調べたところによると、法定速度で走ると5時間43分かかるとのこと。途中事故渋滞等、何かあるか分からない。そのため飛ばせる場所はスピード違反覚悟で飛ばすしかない。

パトカー、ネズミ捕りを気にしながら札幌道、道央道、留萌道、R233、R40号線を飛ばして何とかフェリーに間に合う時間に稚内に到着した(北海道では、本州からの車

がよく交通取締りのカモになるということで、事前に蛭川さんが小野さんの友人からネズミ捕り対策のリーダー探知機というすぐれ物を借りて車に設置しておいた。お陰でドライバーはある程度安心して飛ばすことができた)。

フェリー乗り場近くの無料駐車場に車を止めて、フェリーに乗り込む。朝のうち雨模様の天気もすっかり回復して海も穏やか。利尻島やノシャップ岬などの景観を楽しんでいるうちに、フェリーは礼文島香深港かふかに到着(12時45分)。そこで、一足先に礼文入りしていた小島さんと合流した。港には本日泊まる宿の車が迎えに来てくれていて、その車ですぐに礼文岳登山道入り口まで送ってもらう。

礼文岳登山道入り口は内路という小さな集落にあり、海に面した車道の脇から登り出す。登山道はほんの最初だけ急な登りであつたが、すぐに緩い笹原の中の道となる。そしてトドマツとダケカンバの樹林帯からハイマツ帯に入り、約2時間で頂上(490m)に着いた。礼文岳の山頂は露岩とハイマツのすつきりとしたピークで、そこにはまさに息を呑むような360度の大パノラマが広がっていた。南北に長く伸びる礼文島の全景から海に浮かぶように見える利尻島の絶景を堪能したあと下山にかかる。帰路は往路を戻り、登山

口まで迎えに来てもらった宿の車に乗って心地よい疲労と喉の渴きを覚えながら宿に入った。

この日の宿は「香栄丸」という漁師直営の民宿で、夕食には馬糞ウニと紫ウニの二種類のウニのほかにはホタテ、タコ、カニ、さらにはソイや八角というめずらしい魚の刺身などが供され、全員、海の幸に舌鼓を打った。

7月7日 晴れ “礼文の花を極める”

午前中、一足先に礼文入りして島の探索を終えた小島さんのお勧めに従って礼文島の花のゴールデンコースと言われる桃岩展望コースからレブンウスキソウの群生が見られるという礼文林道を散策することになった。

朝7時に宿を出発、民宿の車で島の南端の知床まで送ってもらう。そこから歩き出して海拔1500〜2500mのなだらかな丘に広がるお花畑の中の遊歩道を元地灯台から桃岩まで行き、さらに礼文林道に入り香深まで約5時間半かけて散策、礼文島の花を堪能した。レブンシオガマ、エゾカンゾウ、チシマフウロ、イブキトラノオ、ハクサンイチゲ、レブンウスキソウ等々、この間、一体何種類の花を見ただろう。佐藤・丸山さんの二人は、花に出会うたびに花の図鑑を取り出し花の名前を調べカメラにおさめておられたが、中

はその場で名前が特定できないものも少なからずあったようであった。

13時少し過ぎに一旦民宿に戻り小休止した後、14時20分のフェリーで利尻島の杓形港に向かう。杓形では蛭川さんが以前に泊つて料理が良かったという「正部川旅館」に泊まる。その晩もウニ、ホタテ、カニ等海の幸を満喫。

7月8日 曇り後晴れ “利尻岳登頂”

3時45分起床、昨晩用意しておいてもらったおにぎりで朝食を済ませ、5時に旅館を出発。宿の車で杓形コース登山口の5合目見返台園地まで送ってもらう。ここには駐車場のほかにトイレ、電話、自動販売機がある。5時13分、さわやかな早朝の冷気の中を本間さんがトップで歩き出す。

6合目までは針葉樹林帯の中の比較的緩やかな道が続いていたが、6合目を過ぎたところから傾斜がきつくなる。植生も針葉樹からダケカンバとなり7合目の礼文岩を過ぎるあたりからハイマツも現れ、傾斜もさらにきつくなる。8時50分、三眺山に到着。ほぼコースタイムどおり。ここから一旦少し下り、背負子投げの難所と呼ばれる急登を快調に登って「親知らず子知らず」というルート中の最難所に入る。ここはかつて落石による事

故も頻発したという急なガレ場のトラバースであるが、慎重に抜けて10時20分、駕泊コースとの合流点に出た。ここは9合目半、あと1ピッチで頂上ということではとす。そこから深く抉れた廊下状の急なガレ場を抜け所々ロープの設置してある岩の斜面を登り10時45分、頂上(1719m)に立った。

利尻岳の山頂は南北の双耳峰からなり高度的には南峰(1721m)の方が少し高いが、崩壊が激しく危険ということで立ち入り禁止、北峰に小さな社があり、そこが頂上となっていた。山頂は賑やかで、社の周りには大勢の登山者が群がるように休んでいたが、我々は南峰側に少し下った所に場所を確保して昼食をとる。天気は快晴で頂上から360度の眺望が楽しめるはずであったが、生憎7合目あたりから下は雲に覆われていて礼文島はるか麓の町並みも見えず。11時25分に山頂を後にして駕泊コースを下る。途中から雲の下に出て眺望がきくようになった。

礼文島や麓の景観を楽しみながら下ること約4時間で、名水100選に選ばれた甘露泉に到着、そこから舗装の道を歩くこと10分、15時35分に駕泊コースの登山口である北麓野営場に到着し長かった登山を終えた。その晩は、駕泊の小野さん紹介の「ホテルあや瀬」に泊まったが、ここでも海の幸満載の料理が

食べきれないほど出て来て、なかには残す人もいた。

なお、利尻岳でもウコンウツギ、エゾツツジ、オニシモツケ、ハクサンイチゲなどの色とりどりの花が各所で見られ我々の心を癒してくれたが、佐藤さんと丸山さんは急登の中でも花が現れる都度カメラに収めるのに余念がなかった。そして夕食の後、佐藤さんが事前に準備した「北海道で期待される山の花(170種)」のリストと、丸山さんが撮った写真(「デジタルカメラのメモリーを小島さん持参のノートパソコンに入れて画像を拡大したもの」)を比較しながら花の名前を特定して改めて礼文、利尻で見た花を振り返った。

7月9日 晴れ “北の大地のドライブ”

朝食後、宿の車で鴛泊港まで送ってもらい、8時40分のフェリーで稚内に戻る。10時20分稚内港着、ここで丸山さん(急用が出来て帰ることになった)と小島さんと別れて佐藤、蛭川夫妻、本間、佐藤の5人は蛭川車でニセコに向う。

ルートは往路と異なる名寄バイパスから道央道に入り札幌、定山溪温泉、中山峠經由ニセコまでの477km。北海道の雄大な景色を楽しみながらのドライブで6時少し過ぎに、その日の宿「シェーンベルク」に到着した。

ここは以前、蛭川夫妻が泊まって良かったという手作りのソーセージで有名な民宿で、手作りソーセージと搾りたての牛乳、新鮮なトウモロコシが美味しかった。夕食後、宿の主人に送ってもらってニセコの温泉で汗を流す。

7月10日 晴れ時々曇り

“北限のブナ林探索”

当初の予定では佐藤、本間、佐藤の3人は羊蹄山に登る計画であったが、利尻岳登頂の疲れが残っていたため羊蹄山登山を翌日に回して、この日は黒松内町にある我が国北限のブナ林「歌オブナ林」の探訪に予定を変更した。車で約1時間、最初にブナ林近くのブナセンターに行ったが、この日は生憎休館日。それでも管理人が特別に扉を開けてくれて内部を見学することができた。ここでブナの生態や黒松内町の地理や歴史についての知識を得た後、ブナ林の探索に向かい、ブナの巨木の茂る気持ちの良い林の中を、佐藤さんの解説を聞きながら約2時間散策を楽しんだ。ここでは、ブナのほかにシラカバ、エゾマツ、トドマツ、ハンノキ、オオカメノキなどが見られ、佐藤さんの樹木の蘊蓄の深さに感心させられた。

午後、倶知安のスーパーに寄って明日の朝食、昼食の買い物をして宿へ。この日は、小

野さんの別荘のある別荘地内のゲストハウスに泊めていただく。夕方、小野さんの奥様が我々のためにわざわざ札幌から出て来てくださり、小野さんからの差し入れのビールと日本酒を、また小野さんの山の友人で蛭川、本間さんとも面識のある藤田さんからの差し入れの新鮮なキウウリとハスカップを沢山持ってきていただいた。(小野さん、奥様、藤田さん、ありがとうございます)。

7月11日 曇り “羊蹄山登頂”

佐藤、本間、佐藤の3名は羊蹄山登山、蛭川夫妻は既に羊蹄山には登っているので今日一日は近くをドライブで過ごすことになった。

朝4時起床、昨日買っておいたおにぎりを食べてゲストハウスを出発、佐藤、本間、佐藤の3名は蛭川さんに車で送ってもらって羊蹄山真狩コースの登山口へ向かう。5時登山口着、早速歩き出す。最初はエゾマツ、トドマツの樹林帯の中の緩い登り。そのうちだんだん傾斜もきつくなりジグザグの道に登ると6合目に到着。そこからさらに急な登りとガレ場のトラバースを経て9時15分、火口壁のコルに到着、羊蹄山の火口は富士山ほどではないが、それでもかなり大きな火口で噴火の規模が偲ばれる。

コルから時計と反対回りに頂上を目指す。この頃から風が強くなり強風の中を大きな岩が積み重なってできた岩峰を越えたり巻いたりしながら進むこと約40分、10時5分、やつと頂上(1893m)に出た。

山頂は強風が吹き荒れるガスの中で残念ながら眺望はゼロ。岩陰で風を避けつつ昼食をとり10時30分下山にかかる。山頂からは火口をさらに半周回するような形で俱知安コースに出る。最初のうちは次々に現れる花を楽しみながら下ったが、それも厭きるとあとは佐藤さんの高度計による「〇〇メートル下ったよオー」という報告を聞くのを楽しみにしながらひたすら下る。

14時33分、半月湖登山口に到着し登山を終了したが、羊蹄山も高山植物の宝庫で、上り下りの各所でイワギキョウ、チシマギキョウ、シラネアオイ、ゴゼンタチバナ、ウコン、ウツギ、エゾカンゾウ等々の花が見られた。なかでも山頂付近に群生して咲いていたウラジロナカマドの花が印象的であった。

6合目から蛭川さんに電話で到着時間を連絡していたため、登山口の駐車場には蛭川さんが車で迎えに来てくれていて、そのまま乗り込みニセコ昆布温泉「鯉川温泉旅館」へ。ここは日本秘湯を守る会会員の宿というだけあって鄙びた一軒宿。昔ながらの風呂場の券

囲気と黄色く濁った湯が素晴らしかった。

この後、7月12日の朝8時に昆布温泉を立って小樽へ。小樽港で小野さんと小野さんの岳友の古田さん(蛭川、本間さんとは一緒に山に登ったこともある旧知の仲で、一升瓶の差し入れまでいただいた)の見送りを受けた後、フェリーで新潟港に出て関越道を通って7月13日の11時少し過ぎに八王子駅に到着して北海道の旅を終わった。

思えば9泊10日の長い旅であったが、同行者にも恵まれ、「あつ」という間に過ぎてしまった感の楽しい旅であった。そのうえ、今回の旅では百名山のうちの二つに登れ、いろいろな花や木についても知識を得ることができて、私にとって本当に収穫の多い旅でもあった。これもひとえに蛭川さんの綿密な計画と旅行中時々示されたきめ細かな配慮、ならびに、佐藤さんの親切なレクチャーのお陰であり、改めてお礼申し上げます。